

アスペルガー障害患者に対する ダンスセラピーの試み

藤本美和子
加護野洋二

はじめに

アスペルガー障害は、自閉症と同様のタイプの相互的な社会的関係の質的障害に特徴づけられるが、言語や認知面の発達の遅れが目立たない点で自閉症とは異なる。また、診断基準、生活上の特徴、障害などが広く知られていないため、見逃されやすく、有効な治療方法は確立されていない。

そこで、アスペルガー障害と診断される患者にダンスセラピーを試みたところ、セッション場面だけでなく、デイケア、日常生活において対人関係の改善が認められたので、そのセッションの経過と対人関係の変化を報告する。

症例 20歳 女性 Y子

現病歴 一歳時、言葉の遅れからスピーチクリニックで遊戯療法を受け始め、すぐに言葉は出現した。集団に入れず、自閉的な生活を送り、小児自閉症と診断される。養護学級を勧められるが、両親の希望で普通学級へ進み、いじめを受けたこともある。パニックを起こしやすく、中学・高校は何とか卒業したが、大学はパニックから登校拒否を呈して一年で中退した。その後、家で自閉的な生活を送っていたが、知人に紹介されて当院を受診することとなる。

来院当初、患者は対人場面での相互性が欠如しており、人と目を合わそうとせず、表情も乏しかった。また、非現実的な話題や誇大的言動に固執し、会話が成立せず、その結果パニックを起こすため集団に入っていくのは困難であった。一方、自分のからだに固執し、O脚矯正のためにもストレッチを独自に頻繁に行っていた。痩せているのにダイエットしたいなど身体イメージ障害が認められた。

一度決めたことはかたくなにこだわり、変更されたり失敗するとパニックを起こした。

そこで医師の判断により、集団で行われるデイケアに参加する前に、ダンスセラピーの個人セッションを行うことにした。

ダンスセラピーの経過

Y子の初診からデイケア卒業までの三年間を、四期間に分ける。

第1期：平成6年4月～10月（個人／毎週）

初回から抵抗することなく、セラピスト（以下Th）が音楽をかけるとO脚矯正のストレッチを始

める。ThはY子を真似てストレッチする。

3回目のセッションからはストレッチの後に、ボディワークや二人組みの脚のストレッチを行う。また、セッションの後半には音楽のテンポを速めてリズム運動をする。初めのうちは音楽をかけてThが動くと、Y子はサイドステップを始めるが、Thが動きを変化させるのに合わせて模倣するようになる。

ストレッチでは柔軟性を発揮したが、リズムに合わせて協調運動からは各関節の堅さと、それに伴いリズムに合わせて動くことの困難さが認められた。

第2期：平成6年11月～7年4月（グループ／隔週）

セッション中はThの近くに位置し、パニックを起こすことなく集中している。時にはY子の持参した音楽をながし、O脚矯正を他のメンバーに指導するようになる。しかし、みんなの反応を無視して独自に行っているのみである。

第3期：平成7年5月～8年4月（グループ／隔週）

他クリニックとのデイケア交流会におけるダンスの練習では、慣れない動きは他のメンバーと比べ、習得が遅いことがみとめられたが、繰り返しの練習にも熱心に参加した。

第4期：平成8年5月～9年4月（グループ／隔週）

ダンスをする時に笑顔が出るようになり、また他のメンバーをダンスに誘ったりするなど、友だち付き合いが出来るようになった。

考察

アスペルガー障害の患者は言語あるいは認知的発達の遅れはみられないが、関心と活動の範囲が限局的であるため、対人関係においてコミュニケーションの不器用さと新しいことを受け入れるのに時間がかかるという点が見て取れる。

今回はY子がO脚矯正に関心があったため、ダンスのセッションに抵抗なく参加することができた。また、個人セッションからグループセッションへの移行の体験が効果を奏し、非言語的な関わりだけでなく言語的にもコミュニケーションを取ろうとするようになっていった。そして、集団の中でパニックを起こさずにいられるようになった。Y子にとってダンスセラピーは自分が受け入れられたと感じられる「場」であり、その結果精神症状が安定し、対人技能を身につけていけたのではないかと考えられた。